

## 査読研究ノート

## 帝国日本の植民地における無教会キリスト教の展開

赤江 達也\*

## 要 旨

本稿の主題は、近代日本に出現した無教会キリスト教が、帝国日本の植民地へと広がっていく過程を概観することである。明治期の著述家である内村鑑三は、教会制度の政治性や党派性を批判し、無教会キリスト教を創始する。この無教会キリスト教は、帝国日本の植民地である朝鮮や台湾にも広がっていった。朝鮮や台湾の無教会についての研究は少なくないが、両者を比較する研究は存在しない。そこで本稿では、朝鮮無教会と台湾無教会の比較研究のための予備的な作業として、両者の成立と展開の過程を概観する。

## キーワード

無教会キリスト教, 帝国日本, 植民地, 朝鮮, 台湾

## 1 はじめに

本稿の目的は、近代日本に出現した「無教会」と呼ばれるプロテスタント・キリスト教が、帝国日本の植民地へと広がっていく過程を概観することである。

無教会キリスト教は、明治期の著述家であった内村鑑三にはじまる。内村は1900（明治33）年に雑誌『聖書之研究』を創刊し、既成の教派教団に属することなく、独自の伝道を開始する。そして、既存の教団のような制度や組織をもたない自らの立場を「無教会主義」と呼んだ。それゆえに、内村の信仰と思想を継承する人びとの実践は「無教会キリスト教」「無教会運動」等と呼ばれる。

この無教会運動は、大正・昭和初期に帝国日本の植民地である朝鮮や台湾でも受容されている。一般的に言えば、キリスト教が海外へと伝えられる際には、宣教団体が組織され、宣教師が派遣される。だが、無教会はいわゆる教会制度をもたず、宣教団体に対しても批判的な立場をとっている。それでは、無教会キリスト教はどのようにして朝鮮や台湾へと伝えられたのか。その受容において、朝鮮と台湾ではどのような異同があるのか。

---

\* 執筆者：赤江達也

所属/職位：国立高雄第一科技大學／助理教授

連絡先：台湾811 高雄市楠梓区卓越路2号 高科大 應日系

E-mail: akaetatsuya@gmail.com

無教会キリスト教の植民地展開については、すでに研究の蓄積がある<sup>1</sup>。朝鮮無教会については、劉熙世(1986;1987;1989;1993;1995)、李璿求(1988)、梁賢恵(1996)、金英男(1997;1998)、新堀邦司(2004)など、台湾無教会については、張漢裕(1988)、石倉啓一(1988;1993;1995)、陳志忠(2005)などである。だが、朝鮮無教会と台湾無教会の共通性や違いを同時に検討しようとする研究は、管見の限りでは存在しない。

そこで本稿では、朝鮮無教会と台湾無教会の比較研究のための予備的な作業として、こうした先行研究の成果を参照しつつ、朝鮮と台湾における無教会キリスト教の受容と展開の過程を概観しておきたい。

## 2 「紙上の教会」としての無教会運動

最初に、無教会運動の展開を捉える枠組みとして、「紙上の教会」という視点を提示しておきたい<sup>2</sup>。

内村は『聖書之研究』を創刊した翌年(1901年)に、投書雑誌『無教会』を創刊し、その中で「無教会」を積極的に唱えるようになる。まず『無教会』第一号の社説で、「無教会」概念を「教会の無い者の教会」と定義する。同時に、第一号巻末の告知欄では、『無教会』を「読者の交通機関」と呼ぶ。この読者の交通機関としての雑誌『無教会』が、第七号の社説で「紙上の教会」と呼ばれるのである(内村全集 9:71,316,516)<sup>3</sup>。

この「紙上の教会」としての無教会運動は、まず雑誌メディアを媒介とする読者のネットワークがあり、その上で、散在する読者=信徒が各地で集会を結成する、という二層構造として捉えられる。内村の読者たちは各地で集会を結成していった。こうした集会を可能にしていたのは、雑誌と読者のネットワークなのである。

内村は1930年に没するまで、『聖書之研究』を刊行しつづけている。その部数は当初は2000部前後なのだが、次第に増加し、終刊時には4,500部に達する(赤江2013:124)。さらに、1920年代以降に内村の弟子たちが独立して伝道をはじめるときにも、集会を主宰するだけではなく、決まって雑誌を創刊した。

無教会の雑誌数は、わかっている限りでも、戦前(1900-1945)に67誌、戦後(1945-1970)に94誌あり、それぞれが数十から数千人の読者をもっていた(赤江2013:250)。1950年代後半には、無教会の書籍や雑誌には、三万から五万人の固定読者がいると推定されている<sup>4</sup>。

無教会読者のネットワークは、海外(中国・アメリカ・メキシコ・ブラジルなど)にも広がっていた。彼らはそれぞれの場所で内村の雑誌を読み、ある者は内村と手紙をやりとりし、近隣の読者と集会を結成した<sup>5</sup>。そしてそのネットワークは、帝国日本の植民地であった朝鮮と台湾にも広がっていくのである。

### 3 朝鮮無教会の形成と展開

#### (1) 内村鑑三と朝鮮人学生たち

内村鑑三は、日露戦争に先立って「非戦論」を唱えたことで知られている。しかし、その後も、朝鮮の植民地化には賛意を示していた。ところが、日露戦争後には批判的な立場に転じる（新堀 2004：7, 56）。そうした変化は、のちに在日本朝鮮 YMCA の初代総主事となる金貞植<sup>キムジョンシク</sup>ら朝鮮人キリスト者との交流によるものであった。

1920（大正9）年には、のちに朝鮮無教会の創始者とみなされる金教臣<sup>キムギョジン</sup>が、内村の聖書講義に参加している。前年に上京した金は、路傍説教に感動してホーリネス教会で洗礼を受ける。ところが教会内に内紛が生じ、金は失望する。その時期に、金は内村の日曜講演を聴き、次第に内村に傾倒するようになる<sup>6</sup>。

1920年代半ばには、金教臣に加え、咸錫憲<sup>ハムソクコン</sup>、宋斗用<sup>ソンドウヨン</sup>、鄭相勲<sup>チョンサンフン</sup>ら六人の朝鮮人学生が内村の下に集っている。彼らは1920年代後半に朝鮮に戻る。その帰還が、朝鮮無教会の起点となる。無教会運動の朝鮮への展開を生み出したのは、朝鮮への直接的な伝道活動ではなく、植民地から内地への留学という学生の移動だったのである<sup>7</sup>。

#### (2) 『聖書朝鮮』の創刊

朝鮮に戻った六人は、1927年に雑誌『聖書朝鮮』を創刊している。彼らは当初、朝鮮の教会に参加する。だが、その礼拝を形骸化したものと感じたため、公開の集会をもち、六人を同人とする雑誌を刊行する。

最初の二年間、編集責任者を務めたのは、東京の神学校で学んだ鄭相勲であった。しかし、1930年5月、第16号からは金教臣が主筆となる<sup>8</sup>。同年、金は京城で聖書研究会を主宰ははじめ、毎年一週間にわたる冬季集会をその後十年間開催した。

『聖書朝鮮』の部数は約300部で、論説のほか、金教臣の日記や読者からの手紙などが掲載された（金 1998；新堀2004：44）。『聖書朝鮮』は、厳しい検閲のなかで、1942年まで継続された。当初の同人六人のうち、終刊まで活動をともにしたのは、金教臣、咸錫憲、宋斗用の三人であった。

金教臣は、日本の無教会主義者とも雑誌や手紙を通じて交流をつづけた。1940年には、無教会伝道者の黒崎幸吉と矢内原忠雄が相次いで京城をおとずれ、講演をおこなっている。

朝鮮総督府による弾圧は次第に激しさを増し、1942年には「聖書朝鮮事件」が起こる。これは、『聖書朝鮮』の一節を理由とした筆禍事件であった。朝鮮無教会のメンバーと読者が検束され、13人が投獄された。金教臣は釈放された後、巡回伝道を試みたり、満州の同志を糾合しようとしたりする。さらに1944年7月からは興南日本窒素燃料会社に入社し、そこで教友を集めようとするが、1945年4月に病死する。

厳しい弾圧にもかかわらず、朝鮮無教会は、他の信徒たちによって戦後へと引き継がれる。朝鮮が日本の統治から解放されたとき、次のように言う者がいたという。「寺内総督は死んだけれども、内村総督は文書を通し、韓国内村党を通して韓国教会に君臨していることを忘れてはならない」(劉1993:241)。

朝鮮の無教会が、実際にそれほどの影響力があったのかは別に検証する必要がある<sup>9</sup>。ただ、こうした批判においても、無教会の影響力が、内村の「文書」と内村門下の人びと(内村党)に由来するものであると見なされている点に注目しておきたい。

### (3) 金教臣の「朝鮮産キリスト教」

朝鮮の無教会受容で問題となったのは、内村のナショナリズムであった。金教臣にとっては、内村の魅力は愛国心にあった。金は内村を「愛国の権化」と呼び、内村から学んだものは、愛国と福音であるという(新堀 2004:21-24)。ただし「愛国」の対象が異なっている。金は、内村の愛国心を通して朝鮮民族への愛国心を養っている。

金教臣は『聖書朝鮮』発刊の理由を「純粋な朝鮮産キリスト教」を解説するためであるといひ、「願わくば朝鮮にキリスト教の能力的教訓を伝達して、聖書の真理の基盤の上に永久不滅の朝鮮を建てよう」と述べている(劉 1989:233)。

この「朝鮮産キリスト教」という標語は、内村が語った「日本的キリスト教」に由来している。だが、金は「日本的キリスト教」を「朝鮮産キリスト教」へと読みかえることで、内村のキリスト教ナショナリズムを継承しつつ批判するのである。

無教会の思想の中でナショナリズムはきわめて重要な位置を占めている。だが、無教会派のナショナリズムには、日本ナショナリズムと対立する可能性も含まれていた。金教臣の「朝鮮産キリスト教」は、無教会派におけるナショナリズムの限界と可能性を鋭く示している<sup>10</sup>。

## 4 台湾無教会の形成と展開

### (1) 台北と台南の集会

台湾では、すでに1911年から、内村の影響を受けたキリスト教徒井上伊之助が、山地などで医療伝道をおこなっている。井上が医療に従事したのは、台湾総督府がキリスト教伝道を目的とする滞在を許可しなかったからである。だが、そうした政治的な規制にもかかわらず、1930年前後には台北と台南でそれぞれ集会が形成されている。

まず、台北では、1928(昭和3)年に新設された台北帝国大学の教授となった松本<sup>たかし</sup>魏が、みと志婦人とともに日曜集会をはじめている<sup>11</sup>。1933年3月、松本夫妻は『芥粒』を発刊する<sup>12</sup>。しかし、台湾では内地以上に統制が厳しく、1938年には『芥粒』は第9号で廃刊せざるをえず、学生集会も中止された。

松本巍は東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）の出身で、宮部金吾の下で植物病理学を学んだ。松本の教師である宮部は、内村や新渡戸と同じく札幌農学校の二期生であり、札幌農学校校長（現在の北海道大学）等を歴任した人物であった。

他方、台南では、1930年代前半に、台湾人読者によって無教会集會が形成される。林添水、王受禄、蔡榮華らは1920年代に無教会伝道者の著書を読みはじめている<sup>13</sup>。林添水と王受禄はいったん教会に所属するが、王受禄が邸内の庭園に会堂を建てると、そこで無教會的な礼拝を持つようになる。その後、台南で医院を經營する黄履鰲<sup>りこう</sup>が加わる。黄は、大阪医大を卒業し、無教会伝道者の伊藤祐之<sup>すけゆき</sup>の薫陶を受けた人物であり、黄夫人も女子医専の卒業生であった。

こうして、林添水、王受禄、蔡榮華、黄履鰲の4人が中心となって無教会集會が発足する。初回の参加者は40名であった。林添水は、内村のほか、藤井武・政池仁といった無教会伝道者の著作や雑誌を読み、それを暗誦したり書き写したりして伝道にもちいた。

なお、台南では、長老教会の牧師や信徒たちも、無教会派の著作や雑誌を読んでいた。林添水は、台南の長老教会の候連湖牧師の弟から、政池仁の雑誌『聖書の農村』（1934年創刊）を借りて読み、それを購読している（無教会史研究会編1993：260）。無教会の雑誌や書物は、内地と外地、教会と無教会といった区別を超えて読まれていた<sup>14</sup>。

## （2）矢内原忠雄という結節点

台湾の無教会受容において重要な結節点となったのが、東京帝国大学経済学部教授で植民政策学者の矢内原忠雄である。

矢内原は大学時代から、新渡戸稲造の「植民政策」や吉野作造の「政治史」の講義に啓発され、内村の集会で朝鮮人キリスト者と交友する中で、「朝鮮人の為に一生を捧げよう」という抱負を抱く（矢内原全集 27：575-576）。その後いったんは家族を養うために住友に就職するのだが、1920（大正九）年、27歳のときに大学へと戻ることになる。植民政策講座を担当していた新渡戸稲造が、国際連盟事務局事務次長に就任するために帝大の職を辞すことになり、その後任として指名されたからである。

矢内原は、ただちにイギリス・ドイツ・アメリカを中心とする欧米への留学と視察旅行に出発する<sup>15</sup>。そして二年半の旅行から帰国すると、教授として植民政策講座を担当する。その後、植民政策学の理論研究や地域研究のモノグラフを相次いで発表している<sup>16</sup>。

なかでも、『帝国主義下の台湾』（1929年）は、「台湾人インテリのバイブル」（王1964：131）、「日本における社会科学的な地域研究の誕生を告げる」一冊（若林2001：340）といった高い評価を得ている。この書物は、刊行後すぐに、台湾総督府によって台湾への持ち込みが禁止されている。その背景には、矢内原と台湾民族解放運動のつながりがあった。

矢内原は、植民地統治が資本主義化を促すことを論じる一方で、長期的には植民地の独立を支持していた。そのため、台湾議會設置運動を推進していた蔡培火が1924年に矢内原宅を訪問

すると、蔡が植村正久門下のクリスチャンであったこともあり、二人は親しい友人関係を結ぶようになる(蔡1968)。

矢内原は『帝国主義下の台湾』を執筆する以前、1927年4月から5月にかけて台湾を訪れている。その際、台湾総督府を通してではなく、蔡培火らの案内によって各地を視察・調査してまわる。また蔡の勧めで、矢内原は各地で講演会をおこなう。それらはときに千五百人もの聴衆を集めるが、警察の監視と民族運動急進派(左派)からの妨害を招くことになる(矢内原伊作1998:388-389)。

### (3) 矢内原門下の台湾人青年たち

この調査旅行中、矢内原は、蔡培火の紹介で、台湾民族解放運動の指導的な立場にあった林獻堂やその秘書の葉榮鐘といった人びとと知り合っている<sup>17</sup>。この出会いは、その双方に大きな影響を与えていく。

1929年11月末の日曜日の夕方、中央大学の学生となっていた葉榮鐘が、蔡培火の勧めにより、東京・大森の矢内原宅を訪問する<sup>18</sup>。その日の夕食後、葉榮鐘は矢内原夫人(恵子)とともに、矢内原の聖書講義を受ける。これをきっかけとして、毎週土曜日に三人だけの聖書講義がはじまる。さらに葉の仲介で、陳茂源が四人目に加わる。陳は、東京帝大法学部を卒業して検事代理として働きはじめたばかりであった(陳茂源1968:110)。

こうして、陳茂源と葉榮鐘という二人の台湾人青年が、矢内原の最初の弟子となる(矢内原伊作1998:388-392)。この出会いは、矢内原にとっては、無教会伝道者としての活動を本格化していく契機となる。そして陳茂源は、戦後の台湾において無教会活動の中心的な人物となる。矢内原の集会には、二人のほかにも、医者となる郭維租や陳茂棠<sup>19</sup>、矢内原研究室の出身で東大経済学部助手を務めることになる張漢裕といった錚々たる青年たちが参加している(張1968a:1968b)。

これらの人びとは、戦後台湾の知的世界で重要な役割を果たした<sup>20</sup>。陳茂源は、台湾大学法律学系教授を務める傍ら、聖書の講義のほか、鄭廷憲が主宰する雑誌《下樂姆》(シャローム、「平安」の意)への執筆、翻訳、詩作といった多彩な活動を展開している<sup>21</sup>。張漢裕は、台湾大学経済学系教授として台湾の経済学を牽引し、英国や日本の経済史的研究のほか、マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の翻訳を手がけている(この点は、大塚久雄と比較しうる)。

無教会派のつながりは、戦後、台湾が中華民国に帰属した後も続いている。郭維租と陳茂源という二人の医者は、戦後も台北(郭)と東京(陳)のあいだで矢内原の雑誌『嘉信』の雑誌の転送を通して密接に連絡を取りつづけていた(何2011:128)<sup>22</sup>。そして、その日台間のネットワークは、その後も、高橋三郎をはじめとする無教会伝道者によって引き継がれている。

## 5 おわりに

最後に朝鮮無教会と台湾無教会の共通性と違いを確認しておきたい。

両者の共通性としては、次の三点が指摘できる。第一に、その知的な性格である。無教会キリスト教をまず受容したのは内地へと進学した学生たちであった。第二に、集会や大学における師弟関係の重要性である。朝鮮の場合には内村鑑三、台湾の場合には矢内原忠雄が「先生」として重要な役割を果たしている。第三に、活字メディアや手紙を介したネットワークである。植民地の無教会キリスト者たちは、雑誌や手紙によって日本の無教会キリスト者とのつながりを維持している。

両者の違いがもっともはっきりと見られるのは、日本のナショナリズムへの態度である。朝鮮では、金教臣が唱えた「朝鮮産キリスト教」のように、無教会主義の日本ナショナリズムを批判的に乗り越えようとする志向が見られる。他方、台湾ではそうした葛藤は見えにくい。むしろ矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』における植民地統治による台湾の資本主義化という問題設定は、台湾の近代化と独立・解放の可能性を示す思想として台湾人学生に強く支持された。

朝鮮無教会と台湾無教会の異同については、さらなる検討が必要である。また、両者の戦後への展開、その思想史的な意義や影響力についても検討できるはずである。今後の課題としたい。

### 参考文献

#### 日本語文献

- 赤江達也 2013 『『紙上の教会』と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店
- Anderson, Benedict, [1983] 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, Revised Edition*, London and New York: Verso. = 2007白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山
- 陳茂棠 1968 「詩篇の先生と精神病院の人々」南原他編『矢内原忠雄』所収
- 陳茂源 1968 「大森の家庭集会の頃」南原他編『矢内原忠雄』所収
- 張漢裕 1968a 「『帝国主義下の台湾』刊行にちなんで」南原他編『矢内原忠雄』所収
- 1968b 「我が師をしのぶ」南原他編『矢内原忠雄』所収
- 1988 「台湾の無教会——その沿革、近況・現状——」『一九八七年無教会夏期懇話会記録』無教会夏期懇話会事務局
- 呉密察 2005 「植民地大学とその戦後」呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾』東京大学出版会
- 石倉啓一 1988 「〈林添水先生（一九〇七—一九八三年）年譜〉覚書」『一九八七年無教会夏期懇話会記録』無教会夏期懇話会事務局
- 1993 「台湾無教会」無教会史研究会編『無教会史Ⅱ』所収

- 1995「台湾無教会」無教会史研究会編『無教会史Ⅲ』所収
- 徐正敏 2012『韓国キリスト教史概論——その出会いと葛藤』かんよう出版
- 金忠一 1981『韓国キリスト教会史』新教出版社
- 金英男 1997「金教臣の無教会思想——キリスト者の共同体をめぐる」『内村鑑三研究』第32号
- 1998「韓国無教会キリスト教思想の研究」東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士論文
- 李瑠求 1988「韓国の無教会」『一九八七年無教会夏期懇話会記録』無教会夏期懇話会事務局
- 松本みと志編 1975『松本巍——み足のあとをしたいつつ』臺北市：精華印書館印行
- 無教会史研究会編 1989『無教会論の軌跡』キリスト教図書出版社
- 1991, 1993, 1995, 2002『無教会史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』新教出版社
- 村山大記 1968「松本巍先生(1891~1968)」日本植物病理学会『日本植物病理學會報』34-4号
- 南原繁他編 1968『矢内原忠雄——信仰・学問・生涯』岩波書店
- 新掘邦司 2004『金教臣の信仰と抵抗——韓国無教会主義者の闘いの生涯』新教出版社
- 王育徳 1964『台湾——苦悶するその歴史』弘文堂
- 梁賢恵 1996『尹致昊と金教臣 その親日と抗日の論理——近代朝鮮における民族的アイデンティティとキリスト教』新教出版社
- 劉熙世 1986「韓国無教会略史」田村光三編『一九八五年無教会夏期懇話会記録』無教会夏期懇話会事務局
- 1987「金教臣(Kim Kyo Sin)の無教会理解」『一九八六年無教会夏期懇話会記録』無教会夏期懇話会事務局
- 1989「金教臣」無教会論研究会編『無教会論の軌跡』キリスト教図書出版社
- 1993「韓国無教会」無教会史研究会編『無教会史Ⅱ』所収
- 1995「韓国無教会」無教会史研究会編『無教会史Ⅲ』所収
- 蔡培火 1968「神の忠僕矢内原忠雄先生を憶う」南原他編『矢内原忠雄』所収
- 高橋三郎 1970『無教会精神の探求』新教出版社
- 高井ヘラー由紀 2003「日本統治下台湾における日本人プロテスタント教会史研究(1895-1945年)」国際基督教大学大学院比較文化研究科博士論文
- 内村鑑三 1980-1984『内村鑑三全集(全40巻)』岩波書店
- 若林正丈編 2001『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』(岩波現代文庫)岩波書店
- 矢内原伊作 1998『矢内原忠雄』みすず書房
- 矢内原忠雄 1963-1965『矢内原忠雄全集(全29巻)』岩波書店
- 米谷匡史 2006『アジア／日本』(思考のフロンティア)岩波書店
- 葉榮鐘 1968「矢内原先生と台湾」南原他編『矢内原忠雄』所収

## 中国語文献

- 陳志忠, 2005, 《日治時期台灣教會經驗初探——以日本基督教會及無教會主義為例》, 東南亞神學研究院神學碩士論文.
- 何義麟, 2011, 《矢内原忠雄及其《帝国主義下の台湾》》, 台北市: 台灣書房.
- 黃子寧, 2008, 〈林獻堂與基督教(1927-1945)〉, 許雪姬編, 《日記與台灣史研究: 林獻堂先生逝世50週年紀念論文集》(下冊), 台北: 中央研究院台灣史研究所, 頁675-729.
- 歐素瑛, 2012, 《傳承與創新——戰後初期台灣大學的再出發(1945-1950)》(二版), 台北市: 台灣書房.
- 松本巍, 1960=2004, 蒯通林譯, 《臺北帝大沿革史》, 臺北市: 臺大圖書館全文數位化.

## 註

- 1 日本統治時代の朝鮮キリスト教史については金忠一(1981), 徐正敏(2012), 台湾キリスト教史については, 高井ヘラー由紀(2003)を参照.
- 2 「紙上の教会」については, 赤江達也(2013)を参照. そこでは, 「紙上の教会」という視点から, 1970年代までの無教会運動の構造とその歴史的展開が描かれている. この「紙上の教会」概念は, これまでの無教会研究ではほとんど注目されてこなかった. 金英男の博士論文はその例外である(金1998). ただし, 金は「紙上の教会」を朝鮮無教会(とくに金教臣)に固有のものと捉えており, 日本の無教会運動には適応していない(赤江2013: 23-25). それゆえに, 「紙上の教会」という視点から, 日本帝国(内地)と植民地(外地)の双方を視野に入れて研究することが課題となる.
- 3 『内村鑑三全集』『矢内原忠雄全集』の引用は(内村全集 巻数: 頁数)等と表記した. なお, 『無教会』は18号で終刊となるが, 内村はその後「紙上の教会」の構想を語っている.
- 4 無教会の信徒数は, その性格上ははっきりとはわからない. ただ, 『キリスト教年鑑』(1958年)の試算では三万から五万人の無教会信徒がいるとされている(赤江2013: 12).
- 5 海外の無教会信徒のほとんどは日本からの移民であり, 日本語話者であった. なお, 内村には英語のネットワークもあり, 1926年3月から二年間の期間限定で, 英文雑誌“The Japan Christian Intelligencer”を発行している.
- 6 この時期, 内村は東京・大手町の衛生会館という大きな会場で, 毎週「ロマ書講義」をおこなっていた.
- 7 ベネディクト・アンダーソンは, ナショナリズムの条件のひとつとして, 官僚などの移動の回路を指摘し, それを「世俗的な巡礼」と呼んでいる(Anderson [1983] 1991=2007: 100).
- 8 劉熙世は, 金教臣が主筆になった1930年を韓国無教会史の起点とみなしている(劉1993: 242). 『聖書朝鮮』は当初は季刊であったが, その後隔月, さらに月刊誌となっている.
- 9 朝鮮無教会の創始者の一人である咸錫憲は, 戦後, 教育大臣等として教育界に影響力を及ぼし

- ている。ただし戦後は無教会ではなくクエーカーを標榜している。
- 10 こうした緊張は、戦後にも継続している。『無教会史Ⅱ』に掲載された劉熙世の「韓国無教会」の記述は、『無教会史Ⅰ』の冒頭で無教会が「内村鑑三によって創始された福音的キリスト教の日本的展開」と定義されていることへの批判からはじめられている(劉1993:239)。
  - 11 松本巍(夫妻)の実践については、石倉啓一(1995:311-312)、記念誌『松本巍——み足のあとをしたいつつ』(松本みと志編1975)を参照。また、研究者としての松本巍については、村山大記(1968)を参照。
  - 12 『芥粒』はすべて、記念誌『松本巍——み足のあとをしたいつつ』(松本みと志編1975)に再録されている。松本巍は聖書や信仰に関するもの、松本みと志は西欧美術に関するものが多い。
  - 13 林添水の経歴については、石倉啓一(1988)を参照。
  - 14 そのほかにも、『聖書之研究』の愛読者であった謝萬安が、民雄の自宅で無教会伝道をおこなっていた。雑誌や書物を通じた交流は、直接的な交流にもつながる。林添水は1937年7月から12月に上京し、無教会伝道者たちを訪問する。その後、戦前には政池仁が、戦後には黒崎幸吉や高橋三郎が台湾伝道に訪れている。なお、戦争が激化し、皇民化政策が進展する中で、こうしたキリスト教関連の書物がどの程度流通しえたかについては、検討する必要がある。
  - 15 その留学中には、最初の著作『基督者の信仰』(1921年)が、内村の序文とともに聖書研究社から刊行されている。
  - 16 矢内原は、まず『植民及植民政策』(1926年)、『人口問題』(1928年)といった理論的研究を刊行した後、『帝国主義下の台湾』(1929年)、『満州問題』(1934年)、『南洋群島の研究』(1935年)、『帝国主義下の印度』(1937年)といったモノグラフを発表している。
  - 17 蔡培火と林獻堂は1934年に帝大の矢内原を訪問している。《灌園先生日記》の1934年4月4日の記述を参照。
  - 18 葉榮鐘は、1927年8月末に上京し、その後まもなく、矢内原を東大に訪ね、その勧めで毎週講義を聴講するようになっていた。なお、葉は矢内原と長く交流をもつが、信仰はもたなかったと述べている(葉1968:101-102,108)。
  - 19 陳茂棠は陳茂源の弟である。戦後も日本に留まり、医者として活動しながら、無教会キリスト者として家庭集会をもっている。陳茂棠(1968)、何義麟(2011:128)を参照。
  - 20 松本巍も戦後の台湾大学農学院に留まり、農作物の病害の研究と防除に尽力している。戦後、松本巍が台湾に残った経緯については、松本みと志編(1975)、歐素瑛(2012)を参照。また、松本巍は《臺北帝大沿革史》を執筆している(松本1960=2004)。
  - 21 陳茂源(1968)、無教会史研究会編(1993:312-314)、黃子寧(2008:708)、何義麟(2011)等を参照。
  - 22 郭維租は、1985年以降、矢内原のキリスト教関係の著作を数多く中国語へと翻訳している(何2011:129)。

## The Expansion of Non-Church Christianity in Colonies of Imperial Japan

AKAE Tatsuya \*

### Abstract

The theme of this manuscript involves outlining the process during which non-church Christianity in modern Japan extended to the colonies of Imperial Japan. Uchimura Kanzō, a writer of the Meiji period, criticized politicalization and factionalism in church institutions and founded non-church Christianity. This non-church Christianity also spread to Korea and Taiwan, which were colonies of Imperial Japan. Research on non-church Christianity in Korea and Taiwan is not scarce; however, there is no previous research comparing the two. Therefore, this paper will serve as a preliminary work for comparative research on Korean and Taiwanese non-church Christianity, outlining the establishment and expansion process of both.

### Keywords

Non-church Christianity, Imperial Japan, Colonies, Korea, Taiwan

---

\* Correspondence to: AKAE Tatsuya  
Assistant Professor, National Kaohsiung First University of Science and Technology  
No. 2 Zhuoyue Rd., Nanzi Dist., Kaohsiung City 811, Taiwan  
E-mail: akaetatsuya@gmail.com

